令和７年度　うすき市
読書感想文･感想画･エッセイコンクール

入　選　作　品　集

臼杵市立臼杵図書館

はじめに

うすき市読書感想文・感想画・エッセイコンクールについては、今回で、読書感想文部門は五十回、エッセイ部門は十四回、また来年度小学校一年生となる幼児を対象とした感想画部門は十回目の開催となりました。市内小中学校の十六校、そして高等学校一校、さらに幼稚園、保育園、こども園の全十一園、一般の方二名のご協力をいただき、三部門に一，五六五点の応募をいただきました。

今回応募された作品では、楽しんで本を読んだり感動したりしている姿、本の内容と自分の生活や経験を重ね共感し、さらに考えを広め深めている姿、故郷を見直し、故郷を感じ愛している姿がみられました。

また臼杵市中央公民館で開催された表彰式での、市長賞・野上弥生子賞の受賞者による朗読は、堂々とした姿と素晴らしい内容で、聞いている人を感動させました。感想画は十二月中旬から一ケ月ほど臼杵市観光交流プラザに展示させていただきました。多くの方に観覧いただき感謝申し上げます。

現在臼杵市では、臼杵っこの将来像として掲げている「『本が大好き』『臼杵大好き』〃臼杵っこ〃」を目指し、第三次計画となる「臼杵市子ども読書活動推進計画」に取り組んでいます。

その取り組みの柱の「読む・書く・表現することを楽しみ、自分の心を豊かにする」の一つとして、このコンクールを実施しています。本を読んだ感想を描いたり、綴ったりすることは、自分の想像や考えを具体的な絵や言葉に置き換え、自身の想像や考えをより確かなものにします。そこからさらに発展させていくことで、他者との関わりの中で自分を感じたり、人間的な成長を感じます。

こうしたことから今後も本コンクールを持続発展させることで、思いやる心、深く感じる豊かな感性、ふるさと臼杵を愛する心を持った「臼杵っこ」を育てていきたいと思います。

最後に、この作品集に収められた作品から感じる、その年齢だからこその豊かな表現、新しい自分や世界の発見への喜び、臼杵のすばらしさを愛する心をじっくり楽しんでいただければ幸いです。

令和八年二月

目　次

【読書感想文部門】

『ともだち』を読んで ……（臼杵市長賞）……海辺小学校　二年　永冨寧彩……1
ミンニと私 ……（臼杵市議会議長賞）……南中学校　三年　木許菜央……2
『たった2℃で…』を読んで ……（臼杵市教育長賞）……臼杵小学校　三年　太田つぐみ……4
極限状況の中の選択 ……（野上弥生子賞）……東中学校　二年　玉井陽向……6
ぼくのともだち ……（優秀賞）……臼杵小学校　一年　小手川樹……8
「ガリガリ君ができるまでをよんで」 ……（優秀賞）……臼杵南小学校　五年　小野蒼二朗……8
自信をもって ……（優秀賞）……海辺小学校　六年　目原夏……9
心の航海 ……（優秀賞）……西中学校　二年　髙橋智愛……11
私の外套を ……（優秀賞）……東中学校　二年　森敬華子……12
へいわなせかいに ……（佳作）……福良ケ丘小学校　二年　田中慈人……14
ねえねえ、なに見てる ……（佳作）……上北小学校　四年　平川遥陽……15
夢に向かって ……（佳作）……川登小学校　五年　竹村倫太朗……16
『ナイチンゲール』を読んで ……（佳作）……臼杵小学校　六年　足立侑里奈……17
シリアの人々の希望 ……（佳作）……西中学校　一年　井俣紗衣……18
私の明るい未来へ ……（佳作）……臼杵高校　一年　伊東陽葵……20

【読書感想画部門】

ユニコーンに変身するお家　……（臼杵市長賞）……カトリック臼杵幼稚園　田代　和……23
おいしそう!!　……（臼杵市議会議長賞）……下南こども園　三浦煌織……23
ピートのぶどういろのくつ　……（臼杵市教育長賞）……アソカ幼稚園　髙橋陽向……24
じっぴきのりすさん　……（優秀賞）……野津こども園　甲斐　光……24
タコようちえん　……（優秀賞）……すみれこども園　河野月奏……25
にじいろハウス　……（優秀賞）……カトリック臼杵幼稚園　小手川　颯……25
がたくん　……（優秀賞）……かいぞえこども園　菅野湊士……26
ぬまのぬし　……（優秀賞）……野津南保育園　長野　悠……26
そらのしんごう　……（優秀賞）……市浜こども園　野間悠月……27
かわのなか　……（優秀賞）……海辺こども園　日隈朱里……27
かぐやひめ　……（優秀賞）……うすきこども園　平川紗菜……28
凍っているいか　……（優秀賞）……臼杵中央こども園　若狭碧空……28

読書感想文部門

臼杵市長賞

『ともだち』を読んで

海辺小学校　二年　永冨寧彩

書名　ともだち
著者　リンダ・サラ

ともだちって、なんだろう。わたしはこの本を読んで、はじめてかんがえてみました。この本は、しゅ人公の「ぼく」となかよしのエトのところに、とつぜんシューがやってきて、ともだちになっていくという話です。

「ぼく」にとってエトは、とくべつな人。わたしにもそんなともだちがいます。二年生の女の子です。同じ学年の女子はわたしたち二人しかいないので、よく一しょにいます。わたしがないていると、いつもやさしい言ばでたすけてくれるので、大せつに思うようになりました。

「ぼく」はエトがシューとあそぶすがたを見て、なかまはずれになった気もちになりますが、わたしはとくべつなともだちがほかの子とあそんでいても、さびしくありません。大せつに思う気もちはかわらないからです。そして、わたしにはほかにもともだちがいるからさびしくないのだと、気がつきました。

わたしはまい日、ほうか後はじどうクラブへ行きます。そこには一しょにしゅくだいをしたりおやつを食べるなかまがいます。「ぼく」がシューのいいところに気がついてすきになったように、ダンスがうまかったり虫にくわしかったり、すごいところを見つけると、その子のことをもっと知りたくなります。ともだちって、わくわくするそんざいです。

ともだちのことで、わたしにはふあんもあります。四年生になるとき、小学校がべつの二つの学校ととうごうすることです。今は六人の同きゅう生が十二人になるそうです。会うのははずかしいです。知らない子に話しかけたことがないからです。でも、「ぼく」は言っていました。三人であそぶとすっごくたのしいと。なんだかゆう気がわいてきました。新しいなかまのいいところを見つけ、いつか、

「一しょにあそぼう。」

と、だれかに声をかけてみたいです。

審査評

本を読んで、登場人物の「ともだち」と自分の「ともだち」について、しっかり考えて自分の体験と関連して書かれていました。文章の構成も素晴らしく、本の内容も分かりやすくまとめられていました。これから出会う「ともだち」にも前

向きに行動したいという思いが伝わってきました。新しい環境になってもたくさん「ともだち」を作ってください。

臼杵市議会議長賞

ミンニと私

南中学校　三年　木許菜央

書名　スラムに水は流れない
著者　ヴァルシャ・バジャージ

「安全な水とトイレを世界中に。」

この本の表紙を見た時、頭に浮かんだのはＳＤＧｓの目標六だった。そのため、環境問題に関する本だろうと思っていたが、想像とは少し異なっていた。

この本は、ムンバイのスラムを舞台にしたもので、主人公ミンニの周りで起こる、水をめぐっての事件や数々の困難に、ミンニが周りと協力し、乗り越えていく話だ。

ミンニが暮らすスラムは、ムンバイの人口の約四十％が住んでいるが、水はたった五％しか供給されていない。家に水道はなく、家の外にある蛇口を近所の人と一緒に使う。水が流れてくる時間は決まっているので、みんなが朝からバケツを持って列に並ぶ。そうしてやっと手に入れた水は、すぐに飲めるわけではなく、わかしてから飲む必要がある。実際、浄水処理されていない水を飲んだミンニの母親は病気になっていた。風呂にも簡単には入れないし、水を盗む水マフィアまでも出てくる。どの家庭にも水道があり、蛇口をひねれば、そのまま飲めるほどの安全な水が出てくる日本に住んでいる私には、想像もできなかった。

このようにスラムの生活は、私の生活とは大きくかけ離れていた。それだけではない。私とミンニもまた、とても同じ中学生とは思えないほど違う生活を送っていた。学費を母親の雇い主に出してもらっていたり、病気になった母親に代わって朝から水をくみに行ったり、家政婦の仕事に出かけたり。加えて、自分が進級するための勉強もしていた。私だったらそんな生活は絶対にできない。

両親が仕事に行き、食事を作ってくれるのが当たり前の生活を送っているからだ。あまりの違いに、私はなかなかミンニに感情移入できなかった。

しかし、読み進めていくうちに、私もミンニも、たくさんの人に支えられているという点では同じだということに気付いた。

母がいない間、ミンニは自分で自分の食事をどうにかしないといけなかった。そんな時、近所のおばさんが「ここではみんな、互いに助け合わないとね。」と言って、ミンニにご飯を持ってきてくれた。他にも、友達のお母さんがミンニの分のお弁当を作ってくれたり、朝、水くみに行っていて学校に行けなかった時は友達がノートを写した紙を持ってきてくれたりした。街の人の温かさに、私も温かい気持ちになった。

私にも大切な仲間がいる。テスト前に、苦手な教科を教えてくれたり、放課後残って一緒に頑張ってくれたりする。部活動の最後の大会で負けてしまったとき、これまで一緒に頑張ってきた仲間が「頑張ったね。」と声をかけてくれた。悔しくてたまらなかったが、その一言で「これまで頑張ってきてよかった。」と思えた。

また、私は、ミンニの母と自分の母とを重ねた。ミンニの母は病気になる前、ミンニには内緒で、パソコン教室への応募をしてくれていた。いろいろな人にパソコン教室のことを聞き、情報収集もしていた。それは、厳しいムンバイの環境の中で、良い暮らしをするためには教育が必要であり、賢いミンニならそれができると考えていたからだろう。

中学三年の私は、この四月からずっと、どの高校に進学しようか考えている。興味があるのは市外の高校。しかし、その高校に進学するとなると、朝六時の電車に乗る必要がある。家から駅が遠いので、車で送迎してもらうことになる。弁当作りもお願いしなくてはならない。どうしたって、今までよりもずっと母に負担をかけてしまう。そんな私の気持ちを察してか、母は「いろいろ考えんで、菜央が行きたい高校に行けばいいよ。」と言ってくれた。また、母自身が、知り合いに高校選びのアドバイスをもらって、私に「こんな進路もあるらしいよ。」と教えてくれた。私の母もミンニの母のように、私の学びたいことを精一杯応援してくれている。国が違っても、環境が異なっても、我が子を思う母の気持ちは変わらないことに気付くことができた。

水マフィアの問題が解決し、母も元気になって戻ってきたミンニは、きっとこれからも周囲の人たちに支えられながら、しっかりと勉強をして、家族のために働いていくだろう。私もそうだ。まだ将来の目標ははっきりとは決まっていないが、周りの人への

感謝の気持ちを忘れずに勉強していこうと思っている。

「みんながわたしとわたしの未来を信じてくれているという自信で胸がいっぱい。世界にいどみ、夢を見続ける準備はできた。わたしの前にいどんだ人たちのように、たとえ波が押しよせてこようとも、わたしは、強くあり続けよう。」

大きな志を抱くミンニに負けないように、私も私の道を力強く進んでいきたい。

審査評

社会格差の問題や水資源の不平等について、厳しい生活の中でも教育を身につけることで、機会を得ようとする主人公ミンニに共感している気持ちが感じ取れました。

ムンバイのスラムに住むミンニと、日本の中学生である自分との置かれている環境は大きく違うものの、自分もミンニも周囲の温かさに支えられているという気持ちが伝わってきました。また、ミンニの大きな志に負けないくらいの強い決意が感じられました。まっすぐに、「私の道」を進んで、将来の目標を見つけてください。

臼杵市教育長賞

『たった2℃で…』を読んで

臼杵小学校　三年　太田　つぐみ

書名　たった2℃で…　地球の気温上昇がもたらす環境災害

著者　キム・ファン

「あついなぁ。」

と言うのが口ぐせになるくらいたくさん言った夏でした。この本の題名は『たった2℃で…』と書いてありましたが、「2℃くらいで、そんなにちがうのかな？」と思いました。でも、本を読み終わった時、わたしの考えはかわりました。たった2℃ちがうだけでいろんなことがかわってしまうことを知ってとてもこわくなり、おそろしいとも思いました。

一番おどろいたのは、気温が2℃上がるだけで、動物や虫、魚たちがそれぞれのすみやすいところに大いどうをはじめて、せかいがかわってしまうかもしれないことです。

初めて知ったことは、ウミガメの赤ちゃんが生まれるまでの、すなの温度によってオスかメスかが決まるので、このまま温度が上がっていくと、メスばかりが生まれてしまうことです。たった2℃上がるだけで、もうウミガメに会えなくなるかもしれません。

こんなことが地球でおきているなんて、大じけんだと思いました。

今の気温と、おばあちゃんの子どものころでは、どうちがうのか聞いてみると、
「家にクーラーがなくても、十分気持ちよくすごせていたよ。今よりもすずしい日が多かったよ。」
と言っていたので、びっくりしました。今とぜんぜんちがうんだなと思いました。

どうしてこんなにも地球があつくなっているのかふしぎに思って調べてみると、地球から宇宙ににげていくはずの熱がふえすぎて、地球の温度がうまくちょうせつできなくなっているからだそうです。自動車や飛行きをうごかしたり、電気を作ったり、ゴミをもやしたりすることで二酸化炭素がたくさん発生していることもげんいんだと分かりました。

わたしが生活する中でもクーラーを使ったり、車で出かけたり、ゴミを出したり、電気もたくさん使っています。

いろんなことを調べて、「このままでだいじょうぶなのかな。」としんぱいにもなったけれど、地球温だん化を止めようと工夫していることも知りました。

それで、わたしにもできることはないか考えました。近くへ出かけるときは、自転車にのることや歩くこと、クーラーの温度を下げすぎないこと、おふろに入る時は、間をあけずにじゅんに入ることなどができそうです。おばあちゃんといっしょに考えたことは、植物をうえて緑をふやしたり、電気をこまめにけしたりすることです。

これいじょう地球が病気にならないように熱が出ないようにわたしにもできることをやってみようと思います。地球に住む動物や虫たち、魚たち生き物がもっとすみやすくなって、せかいがかわってしまわないようにしたいです。

審査評

今年の夏が暑かったという自分の実体験から、本の内容を要約し、地球環境問題についてさらに自分で調べ行動し、知識を広げていました。社会だけの問題とはせずに「これ以上地球が病気にならないように」できることをおばあちゃんと考え、実行していこうという思いが強く感じられました。

野上弥生子賞

極限状況の中の選択

東中学校　二年　玉井陽向

書名　海神丸
著者　野上　弥生子

もしも乗船中に食料がなくなり、極限状況に陥ったら、自分はどういう行動をとるだろう。スマートフォンもなく何もない海の上でどうすることもできない。私なら死ぬことをまつだけで何も行動できないと思う。

しかし、八蔵と五郎助は違った。船が漂流し絶食状態でいた彼らを、獣肉の味覚が誘惑した。彼らは大切な仲間である三吉を殺し食べようとしていた。

私の性格は負けず嫌いで、短気で自己中心的な人間だ。幼い頃から気が強く、友達や家族とよく口喧嘩をしてしまう。

そんなとき、図書室にある一冊の本のあらすじを読んでみると「仲間を殺して喰らおうと企てた」この一文に興味をもった。

私は今まで、相手の気持ちを考えず、何でも発言したり行動したりしていた。発言をした後で、自分でも後悔したり、反省したりするが、つい言いすぎてしまう。いつも後のことを考えず、ついやりすぎてしまっていた。

猛々しく、疑い深い八蔵は、食料が全くない絶食状態で生き延びるため、食料を得るため三吉を殺した。三吉の死骸を見た八蔵は、食べるために殺したはずなのに、殺したとたん衝動が消えた。八蔵は理性を失い、自分のした行動を後悔した。私は、自分が腹を立てたときや、自分の意見を否定されたときに、ついやりすぎてしまう八蔵と似ていると感じた。やってしまった後のことを考えず、あとから後悔してしまう。ついイライラしてしまうと理性を失いかけてしまう。人から否定されるのを嫌がったり、つい自分の意思を優先して発言、行動したりする八蔵に親近感が湧いた。

しかし八蔵は極限状態にたえられず、理性を失い、大切な仲間を殺した。もし、私がその場にいたら、八蔵と同じように殺してしまうと思う。そして、同じように食べられなくなると思う。

そのとき船長は、甥の三吉が殺されたのにも関わらず冷静でいた。その冷静さや、船長としての責任感にあこがれた。なぜなら、大切な甥が殺され、憎しみと復讐の念に燃えたが、船長としての強い自覚をもち、実行しなかったからだ。

私なら、大切な甥が殺され、理性を保つことが出来ず、八蔵や五郎助を殺してしまうと思う。くやしいし、ゆるせないからだ。

しかし、そんなときでも船長は極度の警戒をしながらも、ひたすら金毘羅様を念じていた。いくらあきらめようとしても、またあきらめきったつもりでも助かることを信じ、念じ続けた。そんな極限状況の中でも理性を保ち続け、船長としての責任感や、判断力のある船長のようになりたいと感じた。

私は今まで、相手の気持ちを考えず、ついイライラしてしまい周りが見えなくなることがあった。去年の学年執行部所属のとき

に、合唱練習の中で、失敗してしまったことがあった。合唱コンクールで、隣のクラスに勝って、金賞をとることだけに気がいってしまい、仲間が落ち込むような言い方や、注意をしてしまった。責めているつもりはなかったけれど、相手からしたら練習というよりは、私たちパートリーダーから注意されないために歌うものになってしまっていた。今思えば、隣のクラスに勝ちたい、絶対金賞をとるという気持ちを優先しすぎたため、言い方に現れていたと思う。パートリーダーとして、呼びかけたり、注意したりすることは、当たり前のことだが、私はパートリーダーとしての本来の目的を見失っていた。

極限状況の中、食料がなくなり、周りがみえなくなり、つい大切な仲間を殺した八蔵。私には人を殺すことなんて選択はありえないし、どんどん自己中心的になる八蔵が嫌いだ。しかし、理性を失いかけて、つい自分の意志を優先して発言、行動する八蔵と自分は似ている。この本を通して自分の性格や今までの行動を思い出してみるといつも自己中心的になっていたことに気付いた。相手の気持ちを考えることや、その先の本来の目的まで考えることが大切だと思った。

私は今年も、生徒会副会長として学年執行部に所属している。今は、来週に迫った修学旅行に向けて、クラスや学年で活動をしている。みんなが修学旅行を楽しみにしているあまり、最近はクラスの雰囲気がギスギスして暗くなってきた。自分や自分たちの班の楽しみを優先しようとしているからだ。以前の私ならそんなわがままを我慢せず、はっきり注意したと思う。しかし、船長の極限状況の中での選択や、責任感を見習って、修学旅行本来の目的をみんなで考えようと思う。私は八蔵ではない。今回は、去年のような合唱の失敗はしない。修学旅行の成功を信じて、本来の目的が叶う選択をしたい。船長のように。

審査評

日常や学校生活、そして極限状況の中で自分ならどうするだろうと常に自己を見つめ、向き合っていました。『海神丸』の船長、乗組員の性格や行動を自らと重ね、主題を追及していました。船長のように先を見据え「本来の目的が叶う選択」をしたいという強い意思が感じられました。

優秀賞

ぼくのともだち

臼杵小学校　一年　小手川　樹

書名　ライオンのくにのネズミ
著者　さかとく　み雪

ぼくがよんだほんのなまえは、『ライオンのくにのネズミ』です。ねずみのおとこのこは、パパのしごとのつごうでひっこしをすることになったので、ライオンのくにのがっこうへいくことになりました。さいしょは、ネズミのおとこのこはライオンのことをこわがっていたけど、いっしょにすごしていくうちに、なかよくなっていくおはなしです。

ぼくは、ネズミがライオンのくにのがっこうへいくことになって、かわいそうだとおもいました。しっているひとがだれもいないなかに、ひとりでいかなければいけないからです。あんしんできるばしょも、あまりないとおもいました。でも、とちゅうでリスのともだちができてよかったです。ネズミは、ずっとこわがっていたライオンにたいして、リスをまもるためにたちむかっていけて、かっこいいなとおもいました。からだが小さくても、大きいあいてにむかっていけて、つよいネズミだとおもいました。さいごに、ネズミとライオンがなかよくなれてよかったです。こわかったあいてとともだちになれて、いいなとおもいました。

ぼくのクラスにも、パパのしごとのつごうで、がいこくからひっこしてきたともだちがいます。このほんをよんでいて、そのともだちが、ネズミとおなじたちばだということにきづきました。そのともだちは、にほんにくるときに、とてもふあんだったとおもいます。ともだちがひとりもいないからです。だから、ぼくは、そのともだちがさみしくないように、たくさんはなしかけたいとおもいました。そのともだちとは、まいにちいっしょにかえっています。さいしょは、ジェスチャーであそびながらかえっていたけど、さいきんは、すこしはなせるようになりました。ぼくは、たのしくはなしながら、にほんごをおしえたいし、もっとなかよくなりたいです。

優秀賞

「ガリガリ君ができるまでをよんで」

臼杵南小学校　五年　小野　蒼二朗

書名　ガリガリ君ができるまで
著者　岩貞　るみこ

ぼくは、ガリガリ君が好きです。おいしいし、「ガリガリ」という音も好きです。ぼくは本も好きです。だから、よく図書室に行きます。ある日、図書室を回っていたら、『ガリガリ君ができるまで』という題名の本があることに気がつきました。ぼくは、まよわず、この本を手にとり、読み進めていくことにしました。

「ガリガリ君はどうやって作られるんだろう。」ぼくはワクワクしました。

『ガリガリ君ができるまで』は、稲葉ナナミという人が、ガリガリ君のコーンポタージュ味が販売三日で販売休止になったことを受け、この味にまさるともおとらないヒット作を作ろうと思って、がんばっていくお話です。ぼくは、読んでいて、「そんなにたくさん売れたコーンポタージュ味ってどんな味がするんだろう。」と、とても気になりました。すぐにインターネットで調べてみると、もう販売されていないことが分かりました。少し、残念でした。ナナミはそんなヒット作を超える商品を作れるのか、さらに気になって読み進めていきました。ナナミの働く会社では、千本ノックならぬ、千個のガリガリ君のアイデアを出さなければなりません。さらに、みんなが食べたくなって、まだこの世に販売されていない商品でないと、上司から「普通の味」と言われてしまいます。ナナミは試行錯誤しながら様々な味を考えていきました。ぼくはそんなナナミがすごいと思いました。千個ってものすごい量だし、今、ぼくが頭の中で考えただけでも、少ししか味のアイデアは浮かばないからです。でも、そんな厳しい会社でないと、みんなに愛されるガリガリ君はできないのかもしれないと思うと、ぼくはますますガリガリ君ファンになっていきそうでした。そして、ナナミはどんな味のガリガリ君を考えたのかというと「梅ジュース味」にたどりつきます。「梅ジュースって何？」「おいしいのかな。」ぼくは興味がわいてきました。そしてまたまた、食べてみたいなあという気持ちになりました。千個の味を出して、ナナミ達の仕事は終わりません。そこから、みんながおいしいと思える味にするために、いろいろな成分の量を考えたり、みんなが手に取りたくなるようなパッケージを考えたり、こだわり抜いて、やっとガリガリ君を完成させて、この物語も終わりました。

ぼくは、この本を読んで、ぼくが好きなガリガリ君には、たくさんの努力と工夫がつまっていることが分かりました。いつもは、何気なく食べたり、スーパーや、コンビニでガリガリ君を見たりしていただけだったけど、「ガリガリ君はすごい食べ物だ。」という気持ちを持つようになりました。ぼくは、この本を読んだあと、改めてガリガリ君を食べてみました。「やっぱりガリガリ君はおいしい。作ってくれた人ありがとう。」そんな気持ちになりました。

優秀賞

自信をもって

海辺小学校　六年　目　原　夏

書名　コミック版　世界の伝記四　ヘレン・ケラー

著者　三浦　拓也／監修

「もう一回、もう一回。あの時にもどりたい」私がもう目が見えなくなる、耳が聞こえなくなると分かった時、どうするだろう

か。きっと怖い、これからのことを考えたくないと思考を止めて、何もできなくなってしまうと思います。私は、これまで、「自分に自信がない、みんなのためでも責任が重い、みんなの前で緊張する、だからやりたくない」などと考えてしまい、何事にも消極的で一歩ふみ出せずにいました。そんな時に、私は、ヘレン・ケラーの本に出会いました。

この本を読んで心に残ったのは、ヘレンとサリバン先生の関係です。サリバン先生は、根気強くいろんなことを教え、できるようになるまで諦めませんでした。また、ヘレンもサリバン先生に応えて努力をしました。そのおかげで食事のマナーなどを習得できました。

サリバン先生が、いなかったら、きっとヘレンは、自分で何もできないまま、人にしてもらうだけの大人になっていたと思いました。

また、ヘレンがサリバン先生の言った言葉がわかった時のことも心に残りました。ヘレンは、目が見えず、耳も聞こえなくなって、言葉がわからなくなっていました。でも、サリバン先生が、ヘレンの手にノックをするように言葉を繰り返し教えると、ヘレンにその言葉が通じ、ついには言葉をしゃべれるようになりました。二人の最後までやり遂げようとする気持ちがあったからこそ、言葉を獲得できたのだと思いました。

私は、この本を読んで、ヘレン・ケラーは音のない、真っ暗な世界に閉じ込められて、怖い思いを絶対にしただろうに、一歩ずつ前に進み、自分で知識を得るために苦労しながらも成長していってすごいと思いました。私もそんなヘレンを見て、何かしていかないと思うようになりました。

そのためには、まず、自分に自信を持つ事が大事だと思いました。そして、自分に自信がなくても、とにかく勇気を出して学校の授業で手を挙げて発表したり、機会があれば、行事の中心となってみんなを引っ張っていったりできたらいいと思いました。

一学期、地引きあみの実行委員にチャレンジしてみました。実行委員になるとみんなの前に立って発表することが何度もありました。その度に事前にいうことを考えたり、発表を見てもらったりして準備しました。ヘレンのように苦労した部分もあったけど、チャレンジしてみることで、少し自分に自信がついた気がします。だから、私のように「自分に自信がない、授業中発表できない」と思っている時には、「もう一回、もう一回、あの時にもどりたい」と後悔しないように、今何かできないか、前向きに考えるようにしていきたいと思いました。これから、私は、こうなりたいという目標に向かって、今までの自分から一踏み出していきたいと思います。

優秀賞

心の航海

西中学校　二年　髙橋智愛

書名　海神丸
著者　野上　弥生子

聞きなじみのある臼杵弁。今から百八年前に実際に起こったという海難事件が描かれた物語の中で、登場人物は臼杵の言葉で話しています。私は普段の生活でこのような言葉を話すことはありませんが、母や祖父が長く臼杵で暮らす人と話しているときのイントネーションなのだろうと想像することができます。物語の中で表現される話し言葉には、時々カタカナが混ざっており、一見暗号のようにも見えるのですが、流れてくるドラマのセリフのようにスラスラと私の頭で画として再生されました。これは私が普段、臼杵の言葉を知っているからに違いありません。

海神丸はお正月までのつなぎ仕事のつもりで出航し、予期せず遭難してしまいました。食料や水が尽きていく中で、四人の乗組員が次第に仲間割れしていく模様が描かれています。何日も何十日も食べられない、水でさえも飲めない。見渡すかぎり続く海。自分たちのほかには本当に何もない海。あまりに私の過ごしている毎日とかけ離れているのに、情景や登場人物の気持ちが伝わってきます。短い文と短い描写はとてもリアルで、いつの間にか私の心も百年前へとタイムスリップし、手に汗握る気持ちになっていました。

絶対絶命に心も身体も追いつめられた時、八蔵と五郎助は「食料を隠し持っているのではないか」と仲間を疑い始めます。行き場のない不安、いつ食料にありつけるのかといういらだち。仲間を疑うことで、自分の心を奮い立たせているのではないかと私は考えました。途方に暮れ、イライラした八蔵と五郎助は何かと船長と三吉にいらだちをぶつけ、ついには仲間であるはずの三吉を殺してしまいます。殺してまで食べたかった三吉の肉を食べることができなかった八蔵に、私は人間らしさを感じました。変わり果てた三吉の姿に今まで一緒に過ごした思い出を見たのでしょうか。それとも、自分の犯した罪の重さに我に返ってやっと気づいたのでしょうか。きっと八蔵が憎かったのは三吉ではなく、空腹だったと思います。そのことに八蔵が気づいたから、心を取り戻したから、呆然と立ち尽くし、自責にかられたのだと想像しました。

現代、不安のない生活をしている私自身さえも、お腹がすくとちょっとしたことでイライラしてしまったり、考えがはたらかなくなったりした経験があります。いつもと違い、冷静ではいられなくなり、自分の心のコントロールができなくなるのです。私の少しの空腹などとは比べようのない、極限の空腹が八蔵の精神を蝕み、三吉を殺してしまったのだと思います。

海神丸の四人も、決して準備不足だったわけではありません。相応の準備をして出航したにもかかわらず、壮大で恐ろしい自然

の脅威には敵わなかったのでしょう。

そう考えると、海神丸で起こってしまった事件はただの昔話ではありません。この数年の自然災害は年々大きくなっていて、実際に海の近くにいる時に地震が起こり、高台に避難した経験もあります。また揺れるのではないか、津波が来るのではないかと、父が迎えに来てくれるまでとても不安だったことを覚えています。もしかすると空腹だけでなく、不安も平常心を失う、原因の一つかもしれません。

船長はなぜ八蔵と五郎助のことを許したのでしょうか。理不尽に殺された三吉の仇をとりたいと思ったはずです。けれど、そうせずに少しでも三人が助かる方法を船長はとりました。なぜでしょう。殺すか殺されるかの緊迫した状況でも、平常心を忘れなかったのです。けれど、もし八蔵と五郎助が三吉の肉を食べてしまっていたら、船長は食べずにいられたでしょうか。もしかすると、八蔵の立場になるのかもしれないし、変わらない状況に絶望し、陸に戻ることを諦めてしまうかもしれません。私だったらどうしただろうかなど考えますが、全く分からず、いろんな思いが心の中を巡ります。

臼杵に生きた先人が経験した事件のことを臼杵出身の野上弥生子が描き、その本を何十年も後に臼杵に生まれた私が身近な気持ちで読めたこと。何ともいえない不思議な感覚で現在と過去のタイムスリップをした私の心の航海は終わりました。

絶望し、自分が自分ではなくなった時。その時に思いもしないような事件を引き起こすこともある、ということ。海神丸で起こった事件は、現在でも起こりうる話かもしれないと思いました。その時に私はどんな行動をとるのでしょうか。自分自身に問いかけながら、また何年後かに海神丸に乗船し、心の航海をしてみたいです。今とは違う自分の思いが見つかるのかもしれません。

優秀賞

私の外套を

東中学校　二年　森　敬華子

書名　スピノザの診察室
著者　夏川　草介

「暗闇で凍える隣人に外套をかけてあげる」という一文があるが、私は、「他人の為に何かをする」ということをあまりしたことがなかった。家ではお手伝いを言われないとやらなかったし、学校では、生徒会や委員会の仕事は「誰かの為」ではなく、自分がしたいからしていた。しかし、この本を読んでから、人を助けるということの定義ががらりと変わった。

『スピノザの診察室』は、京都の地域病院で働くマチ先生の姿を描いている。かつては大学病院でたくさんの人の病気を治してきた凄腕の医者のマチ先生。そんなマチ先生が追究しているのがスピノザの哲学だ。

スピノザの哲学は、「この世界の流れは最初から決まっていて、人間の意志では何も変えられない」という前提がある。だからこそ、努力が必要だと言っている。

そして、私もこの哲学に救われた。二年生になってからの生徒会選挙で落選して、「どうせ副会長になれなかったんだから、選挙活動に時間と手間をかけたのは、意味が無かった」とマイナス思考になりかけていた。しかし、この本を読んで、「選挙に挑戦するだけでも意味があったんだ」と、はっと、気づかされた。選挙活動でポスターを夜遅くまで作ったり、苦手な早起きを自らして、登校時の挨拶運動をしたりしたことは無駄じゃない。新たな発見や活動につながる、大切な経験だった。私の中で、落選したという苦い体験が、幸せな挑戦の経験に変わっていた。

「暗闇で凍える隣人に外套をかけてあげる」というマチ先生の哲学に、私はこんなことができるような器の大きい人間ではないなと自分を振り返って思った。自分が着ている外套を、隣人にかけてあげるということは、自分が脱いで寒い思いをしなければならない。そして、「人々」ではなく「隣人」なのが一人ひとりの患者さんの顔をみる、マチ先生らしいと思った。マチ先生は龍之介くんを助けるために、大学病院をやめた。患者さんと向き合うために、ボストンに行くのをやめた。私なら、外套が二枚あれば、一枚をかけてあげることはできるかもしれないけれど、自分を犠牲にしないと救えないという状況では、正義を行うことはできないと思った。ただでさえ、私は日常生活で自分のことを優先しがちだ。ある時、先生が重い配布物を持って、教室に入って来た時、私は自分の作業の途中だったので、見て見ぬふりをした。しかし、数人のクラスメイトがさっと立ち上がって先生に駆け寄り、配布物を受け取った。「配布係でもないのになんで自分がやっていることを中断してまで手伝うんだろう」とその時は思ったけれど、この本を読んで、その時のことを思い出し、後悔している。

それに気付いた時、私はどうして選挙に落選したのかがなんとなく分かった。当選した人は、まさに自分のしていることを中断してでも困っている人を助けに行くような人だ。きっと、みんなは日頃からそういうことをきちんと見ていたのだと思う。そう考えたら、私が選挙で落選したことの意味は、ポスターを書いたり早朝の挨拶運動をした経験だけではない。私が今まで他人とどう関わってきたのかを自分で知ることができたことだ。

マチ先生が人生を変えてまで大学病院をやめたことと、私が作業を中断して先生を手伝うことでは、スケールが違う。しかし、本質的には、人を助けるために自分を犠牲にすることは同じだ。犠牲というのは大げさかもしれないが、時間や労力、お金など、自分の物を差し出すこと、それが外套をかけることだと思った。誰かを助けるためには、大怪我でもかすり傷でも、無傷ではいられないということが分かった。

今までの私は、人を助けることは、綺麗事のように思っていた。でも、この本を読んで、誰かの犠牲と引きかえに、人を助けるという行為が成り立っていると思うようになった。そう考えた時、

私は「暗闇で凍える隣人に外套をかけてあげる」ことはできるだろうか。私が脱いだ外套の温かさで、隣人の命が助かったとしても、私が凍え死んでしまったら、私は満足できるだろうか。私は隣人を助けたいが、自分が死んでしまっては意味が無いと思っている。きっと、マチ先生は自分が死んでも患者が助かったら満足するのだろう。それがマチ先生の生き方だ。私には真似できない。しかし、私には私のやり方で隣人を助けることができる。外套を上下に切り分けて、私も隣人も温まればいい。もしくは、もう一枚の外套を探しに行ける。その場で焚き火をすることもできる。私はマチ先生のように大きな犠牲を払って、誰かを助けることはできない。けれど、私がしたいことをして楽しみながら、誰かを助けたり、役に立ったりすることはできる。それが私のスピノザの哲学だ。

佳作

へいわなせかいに

福良ケ丘小学校　二年　田　中　慈　人

書名　かわいそうなぞう
著者　土家　由岐雄

ぼくは、夏休みに、『かわいそうなぞう』という本を読みました。せんそう中にころされたどうぶつ園のぞうのお話でした。

この本をはじめて読んだ時、ぼくは、とてもかなしい気もちになりました。そして、とてもおどろきました。なぜかというと、せんそうにどうぶつ園のどうぶつたちがかんけいしていたなんて、考えたこともなかったからです。

せんそうがはじまったせいで、どうぶつ園のどうぶつたちは、おりがこわれてまちであばれたら大へんなことになる、というりゆうでころされてしまいました。

ほとんどのどうぶつたちは、どくでころされたけど、頭がよくて体も大きくてどくがつかえないぞうたちは、食べものを一つもらえずにしんでしまいました。

ぞうたちは、何もわるいことをしていないのに、人間たちがはじめたせんそうのせいでころされました。せんそう中にこんなにかわいそうなどうぶつたちがいたことをぼくは、知りませんでした。

そして、どうぶつ園が楽しいばしょだと思える今のへいわな時だいに生きていて、本とうにしあわせだとかんじました。

せかいでは、今でもせんそうをしている国があります。せんそうは、たくさんの人がしんでしまうだけではなくて、たくさんのどうぶつたちもしんでしまう、とてもかなしいものです。

この本のぞうたちのように、かわいそうなめにあうどうぶつたちがこれい上ふえないために、二どとせんそうなんかおこしちゃいけないと思いました、

みんながかなしい気もちになるせんそうは、ぜったいにおきて

ほしくないと思います。
ぼくは、毎日へいわにすごせるように、いろんな友だちや国の人たちと、なかよくしていきたいです。

佳作

ねえねえ、なに見てる

上北小学校　四年　平　川　遥　陽

書名　ねえねえ、なに見てる？
著者　ビクター・ベルモント

この本をよんで、人によって見え方がちがうことにびっくりしました。まずねえさんのイレネは生きものがすきだからお肉もお魚もたべれないから、げんしじだいにいったらどうなるのかがわからない。
弟は、まだ小さいから、パンやらお魚やらなんでも大きく見えるかもしれない。
ママは、科学者だから、科学的にたべものや、かぞくや、たてものもみてるかもしれない。
パパはいつも、むかしのゲームばかりしてるから、まわりもゲームのせかいに見えているかもしれない。
いとこのルーカスは、頭のなかがきょうりゅうでいっぱいできょうりゅうをみたらどのきょうりゅうかわかるかもしれない。
オレオは世界一の友だちだ。ぼくのこともだいすきだけど、お肉のにおいもだいすきだから、ごはんでお肉がでてほしいとおもっているかも。
マルタおばさんは、画家だから、キュービストとよばれるむかしの画家たちのことをしょっちゅう話す。
カルメロおじさんはなんでもしってる。ママよりもはやくうまれているから、もの知りだと思ってるから、ひとりでしゃべりまくるけどたまにおしえてくれて、むかしは、そんなことがあったかわかる。
パコおじさんは、音楽家で、「音も目に見える」が口ぐせだからみんなへんだなとおもっているかも。
フーリアおばちゃんは、「かぞくみんな、すてきに見える」っていってるけど、ほんとにそうおもっているかわからないからしんじられない。
ラモンおじいちゃんは、おおむかしの人なんだけど、テレビがあたらしくなったら、いつも３Ｄのメガネをかけるようになったらしい。
わっ、大きなハエだ。ハエは、ぼくたちのことを、どんなふうにみてるのかな。大きな人だとおもっているのか、それともおそろしいばけものだとおもっているのかな。それともついていったら、ごはんがあるばしょへつれていってくれるとおもっているのかわからない。でもみんなどんなふうにみてもだいじなのぼくのかぞくにかわりはありません。みんなちがってても、みんない

いと思います。
　ぼくはともだちからどんなふうにみられているかきになってたけど、この本をよんで、まわりの人からどのようにみられているかなんてきにしなくていいと少し思えるようになりました。みんなまわりの世界を自分の「メガネ」をかけてみているからだと思ったからです。ぼくはぼく。それでいい。ぼくのかぞくはかぞくそれでいいと思ったからです。ねえねえ、なに見てる。

佳作
夢に向かって

川登小学校　五年　竹村倫太朗

書名　夢は牛のお医者さん　よろこびも悲しみも夢になる　小学館ジュニア文庫
著者　赤羽　じゅんこ

　ぼくは、本を読むことが好きではありません。なかなか「がんばって読もう」という気持ちになれませんでした。そんな時、図書館の「感想コーナー」で出会ったのが『夢は牛のお医者さん』という本です。
　ぼくは牛などの動物が好きなので「おもしろそう。」と思いました。
　本には「ともみ」という小学生が出てきます。ともみの小学校には入学生がいないので牛を入学させることにしました。ともみは動物好きなので、とてもわくわくしていたにちがいありません。
　ぼくの学校も来年は入学生がいません。六年生が卒業すると、人数がへってしまいます。へった分だけ牛がくるのをそうぞうするだけでもわくわくします。
　ともみの学校は三頭の牛をむかえました。一頭目はモグタン、二頭目はつよし、三頭目はげんきです。牛が入学し、ともみは「これからわたしが世話をする。」ということを考えると、うれしい気持ちになったことでしょう。
　牛の世話は、毎日のエサやり、水あげ、牛小屋のそうじ、などたくさんあります。ぼくはそうぞうするだけで頭の中がパンパンになりました。それをやりこなすともみはすごいし、かっこいいと思います。ぼくも動物好きで、何年かたったら牛をかうこともあるかもしれません。でも毎日エサをやったり牛小屋のそうじをしたりするのは、今のぼくでしょう。だから、ともみの努力はすばらしいとだれもが思うのではないでしょうか。
　そんな世話をつづけていたある日、一頭の牛がげりをしました。ともみは心配です。ぼくも牛が本当に助かるのか心配になりました。そのときに、動物のお医者さんが来て、牛の命をすくってくれました。ぼくもかっこいいと思いましたし、目の前で見たともみはなおさらだと思います。そしてこの出来事をきっかけに、ともみは夢をたてました。牛をすくう動物の医者という夢です。
　ともみは夢にむかってがんばりはじめました。牛の世話にくわ

えて、勉強をするなど、夢への第一歩をふみだしました。そして、高校、大学などで学び、じゅう医師になりました。ペットのお医者ではなく家畜のお医者さんです。じゅう医師となったともみは、自分の人生を語ります。ともみは、「あきらめたりやめたかったときもあった。」と言っていました。だけどあきらめなかったからぼくはともみの夢がかなったのだとおもいました。

ぼくの夢はけいさつかんです。

ともみと同じように目の前でその仕事を見たことがきっかけです。そのけいさつかんはぼくの父です。父は「人の命を一番に考える。」と言っていました。ぼくはそれを聞いて思いました。「父も自分なりに努力して夢をかなえたのだと思います。」しかも仕事も家族も大切にする父はじまんの父です。

佳作

『ナイチンゲール』を読んで

臼杵小学校　六年　足立侑里奈

書名　ナイチンゲール　おもしろくてやくにたつ子どもの伝記　十一

著者　早野　美智代

私は『ナイチンゲール』という本を読みました。この本を読んだのは、伝記が好きで、パッと見た時、読みたいと思ったからです。

この本は、優しさだけじゃなく、物事を正しく見る目と強い心の大切さを教えてくれる本です。ナイチンゲールが自分自身とたたかい、まわりとたたかい続け、今の病院や看護の基礎を築いた女性の物語です。

私は、心が動いた場面が二つあります。

一つ目は、自分がしたいと思った仕事をやるために諦めず、看護婦がしたいと言う夢を実現した所です。周りとちがうことをするにはとてつもない大きな勇気がいると思います。そんなナイチンゲールに私は惹かれました。私だったらあまりの大変さに看護婦になるという夢を捨ててしまうと思います。ナイチンゲールは強い心を持っています。まるで地面からなにかされないかぎり動かない一本の立派な木みたいだと思いました。そういうナイチンゲールだからこそ自分の夢を実現でき、快適な病院づくりができたんだと思います。私も途中で逃げ出さずに懸命に食らいつき、やり切ろうと思いました。

二つ目は、死んでゆく兵士たちを決して一人にしなかったことです。それだけナイチンゲールは命の重さを重く考えていたんだと思います。一人で死ぬのとだれかがそばにいてくれるのでは大きくちがってくると私は思います。なぜなら、誰かがそばにいてくれるだけで私は、心が温かくなるからです。もし自分だったら一人ぐらい見捨ててしまうと思います。そんなに今まで命について深く、考えたことはありませんでした。ナイチンゲールが命のことについてどう思っていたかは分かりません。だけど、大切に

思っていた事が読む中で伝わってきました。

しかし私は、ナイチンゲール自身が体調を崩しているのに手紙を書く手を止めなかったのには疑問に思いました。他の人を元気づけるならば、まずは、自分の体調が第一だからです。無理をして悪化したらもっとひどくなってやりたい事もできなくなるかもしれないからです。多分、ナイチンゲールは自分も大事だけど、困っている人を助けたいという気持ちの方がずっと強かったんだと思います。

私は、この本から、粘り強さと強い心を学びました。この本で読んだ事を活かして嫌な事も諦めないで粘り強く取り組みたいなと思いました。今、ランニングを頑張っています。しかし、このごろやらなかったりする日が増えていました。しかし、この本を読んで考え方が変わりました。バスケットボールをするために始めたランニング。大きな夢のために始めたのにこんなところで、諦めたら負けだと思いました。ナイチンゲールはこんな小さな事で諦めない心を持っていたはずです。

ナイチンゲールができたんだから自分にもできると思いました。

これからは小さな事でも諦めず、大きな事のために自分自身と戦っていきたいです。

佳作

シリアの人々の希望

西中学校　一年　井俣紗衣

書名　戦場の秘密図書館　～シリアに残された希望～

著者　マイク・トムソン

世界には命がけで毎日を生きていて何年も戦争が続いていて、自由に生活ができない国があることを『戦場の秘密図書館～シリアに残された希望』という本で知りました。

シリアという所では何年も内戦が続いていて包囲されていました。その中である建物の地下で敵にばれないように営んでいた図書館がありました。そこにはアムジャドという十四才の男の子がいました。アムジャドはその図書館の司書長をしていました。アムジャドは読書が大好きな子だったので、食料が少なく毎日うす味のスープ一杯くらいしか飲めない生活でも、「読書をしていれば、おなかがすいていることを忘れていられる。」と言っていました。もしも私がそういう生活をしていたら、こんなにごはんが食べられない生活をして毎日のように攻撃されて銃弾が飛びかう街では生きていけないと思いました。

シリアという国は二〇一二年十二月にアサド派勢力に包囲されて以来、外部から何も援助も受けられない状態で、食べ物も薬もなく、包囲されている状態だったので、どうやって生きていった

のだろうと思いました。その時に私はあのアムジャドが司書長をしている、秘密の図書館で人々が本を読んで心をいやしているのかなと思いました。アムジャドがいっていたように、本を読んでいればおなかがすいていてもそんなことを忘れるということは本当なんだなと思いました。

でも、その図書館ではどのようにして図書館にたくさんの本が入ってきているのだろうと私はここで、疑問を抱きました。その答えは本に書いていました。それは街が包囲された一年後に本の救出作戦が始まったからです。爆撃で破壊された家の所などに行ってその家にあった本を救出したりする作戦です。でも、政府軍の狙撃兵が街にはたくさんいて、監視をしていて見つかったら命はないので、見つからないように行って探すのは命がけだったと思いました。そんな中でも本が約一万四千冊も図書館にあったのでどれだけ苦労して命がけで本を救出したんだろうと思いました。狙撃兵に見つかると命はないという危険があったのに心をいやして命を守るために頑張っている人だなと思いました。時には見つかる可能性が低い夜中にシリア軍が同行して、本の救出に行ったそうです。その救出には条件があり、それは照明を使わないということでした。その救出は成功してその本の中には、価値の高い物もありました。死ととなり合わせで命がけだったので、勇気のある作戦だと思いました。

秘密の図書館ができてから約二年がたったころのある日の朝、運営メンバーが図書館に行くと信じられない光景が目の前にありました。それは秘密の図書館の入口部分が大きく壊されていたことです。爆弾が近くに落ちたのでした。図書館の本だなは直せないくらいひどく破壊されていて、本は散乱していました。でも本自体はダメになっていませんでした。爆弾が落ちた時に図書館の中には誰もいなかったことが一番幸いでした。でも私がもしアムジャドだったら、言葉にできないくらいに大きなショックを受けていたと思いました。でも、メンバー達は、「もう一度、この図書館ににぎわいをとりもどそう。」といい、前向きに作業を始めていました。私はこんな中でも前向きな考えができてすごいと思いました。

私がこの話の中で一番心に残った言葉は、図書館の運営メンバーが言った言葉で、「もう一度、この図書館ににぎわいをとりもどそう。」という言葉です。図書館が壊された状況でも前向きな気持ちになって、にぎわいを取りもどそうという気持ちになるのは私にはできなさそうだけど、仲間と力を合わせてやっているのがとてもすごいと思い、行動も言葉も一番心に残りました。

この後は、シリアの包囲は終わりました。生き残った人々は二日以内に荷作りを終わらせて、バスに乗りシリアの外の国に避難することになりました。最後にアムジャドが秘密の図書館に行って、最後の最後まで図書館を見ていた気持ちが私も分かった感じがして、とても悲しい気持ちになりました。バスに乗ってちがう国に行く時も、今まで過ごしてきた所を、もう二度と帰れないと考えると、アムジャドみたいな子ども達がどうしてこんなにつら

い思いをしなければならないんだろうか、どうして罪のない人たちがぎせいになってまでこんな事をしなければならないのだろうと思いました。この話は、平和の大切さが分かる話で、悲しい事もあったけど前向きになれるいい話だと思いました。

佳作

私の明るい未来へ

臼杵高校　一年　伊東陽葵

書名　すずめの戸締まり
著者　新海　誠

私がこの作品を読んで一番心に残ったことはすずめが過去の自分に向かって、「心配しないで。未来なんか怖くない。」と語りかける場面だった。なぜなら、私自身も「未来が怖い」と感じてしまうことがあるからだ。

『すずめの戸締まり』は閉じ師という仕事を通して災いの元となる扉を閉めていく女子高生のすずめと青年、草太の物語である。旅の中ですずめは自分の過去と向き合い、大切なものを思い出し、成長していく。ファンタジーでありながらどこか現実味のある物語だった。

この作品を読みながら、私は何度も「喪失」という言葉を思い出した。すずめは小さい頃に母親を亡くしている。自分ではもう思い出せないほど幼い記憶の中で、その喪失はずっと彼女の中に残っていた。普段は元気に暮らしているけれど、心のどこかにぽっかりと空いた穴のようなものを抱えている。その姿が私にはとても現実的で、共感することができた。また、この作品では誰かを守りたいという気持ちが強く描かれていた。すずめが自分の命を捨ててまで草太を助けようとしている姿。草太が日本の人々を守ろうと自分を犠牲にしてまで災いに立ち向かう姿。叔母の環が姉のかわりにすずめを守り抜こうと行動する姿。それぞれが自分の大切な人を思って動いている。その姿を見て、今、本当に大切な人たちのために自分には何ができるのだろうと考えさせられた。

「すずめはこの先、ちゃんと大きくなるの。だから心配しないで。未来なんて怖くない！」

未来のすずめが過去の自分に語りかけるこのシーンは、今の私たちにも向けられているように感じた。今、どんなにつらくても未来が怖くてもちゃんと大人になる。そこには、ただ優しいだけでなく、悲しみも、不安も、これまで乗り越えてきたからこそ言うことができる「強さ」があった。

私はこの物語に登場する「戸締まり」には単なる儀式などではなく、人の心の中にある「閉じるべきもの」を象徴しているのではないかと考えた。悲しみや痛み、失われたものとの別れ。それらと向き合い、自分の手で扉を閉めるという行為にはきっと前を向くための決意が込められている。「いってきます。」とすずめが最後に扉を閉めるとき、それは彼女自身の心のけじめでもあり、

これからは過去のことを忘れずに繋いでいこうという気持ちも織り交ぜられていると思う。

私も時々、将来が不安になること、諦めようと思うことがある。進路のこと、人間関係のこと、自分はちゃんと大人になって社会に出ることはできるのかという漠然とした不安。特に最近は、「失敗したらどうしよう。」や、「このままの自分で成長できるのかな。」「周りから見た私ってどんな感じなんだろう。」と悩むことが増えた。新しい高校生活が始まったということもありストレスを感じることもあった。ＳＮＳを見て他人と比べたり、自分だけが立ち止まっているように感じたりすることもある。だからこそ、すずめのように過去の自分に「未来なんて怖くない」と言えるようになるにはどれだけの勇気と時間が必要なのだろうと考えさせられた。たとえそう言い切れなくても少しずつでも前を向いて歩いて行ける強さを持ちたいと思った。

『すずめの戸締まり』は、自然災害や死といった重いテーマを扱っているけれど、読む人に「生きるってこういうことなんだ」と教えてくれるような希望のある物語だった。辛いことがあっても、人は誰かと支え合って少しずつ前に進める。過去の痛みを乗り越えて大切な人を想いながら、自分の人生を歩いていける。そんなメッセージを私はこの本から受け取った。

私は今、高校一年生になってクラスの文化祭実行委員を務めている。私のクラスは同じ中学の人がいなくて、初めて会った人たちと生活することになっている。だが、みんながお互いを支え合い、高め合えているから良いクラスができていると思う。実行委員もとてもやりやすい環境ができている。人と支え合うことが大切だと改めて知ることができた。

この本を読み終わったとき、私は少しだけ未来が怖くなくなっていた。すずめのように過去の自分に「大丈夫だよ」と声をかけられる日が来ると信じたい。そう思えることがすでに少しだけ強くなれている証拠なのかもしれない。

私の明るい未来へ。「行ってきます」

審査評〈感想文部門〉

御入賞おめでとうございます。

各学校の審査を経て集まった一三六六編の読書感想文について、十月より審査員六名で個別審査、部分審査を行いました。

審査基準は以下の七点です。

一、年齢・学年にふさわしいものであるか
二、原文をよく読みこなしているか
三、要旨・主題を正しく豊かに把握できているか
四、ものの見方・考え方が、自分なりに価値づけられているか
　＊自己の体験との重なりがあるか
五、美しく・正しい文章表現になっているか
六、感銘深い作品になっているか
七、プライバシーの点で問題にならないか

どの作品も、一冊の本との出会いをきっかけにして、自分で考えたことや新たにきづいたこと、感動したことなどを表現していました。特に、入賞した十五作品に共通する素敵なポイントは以下の四点です。

まず一点目は、「選書の素晴らしさ」です。「選書」とは本を選ぶことです。皆さんが選んだ本はどれも「その学年でぜひ読んでほしい」「これに挑戦するのか！」と審査員が唸るようなものばかりでした。まずはその「本を選ぶ目」に敬意を表します。

次に二点目は、「言葉選びのセンス」です。自分の心の中に生まれた思いを、一生懸命に言葉にしようとした跡が見えました。美しい表現、力強い言葉、それらが原稿用紙の上で生き生きと躍動していました。

三点目は、「伝える楽しさ」です。皆さんの文章を読んでいると、「こんなに面白い本があるなら、私も読んでみたい！」と、私たち審査員もワクワクさせられました。

読者に「読みたい」と思わせる力は、文章を書く上で最も大切な才能です。

最後四点目、一番感動したのが「自分を見つめる力」です。ただ本の内容をなぞるのではなく、物語や筆者の言葉を一度しっかりと自分の中に受け止め、「自分ならどうするか」「これからの自分はこう変わりたい」と自分自身と向き合っていました。

本を読むことで、皆さんの心が一回り大きく成長したことが伝わってきました。

「ウォルト・ディスニー」の名言に「宝島の海賊たちが盗んだ財宝よりも、本には多くの宝が眠っている。そして、何よりも、宝を毎日味わうことができるのだ。」という言葉があります。「臼杵っこ」のみなさんには、いっぱい本を読んで宝物をたくさん見つけてほしいと思います。

おわりに、読書感想文コンクールは今回で五十回目となりますが、本コンクールがこれほどの長きに渡り続いていることは、毎年応募してくれる子ども達は勿論のこと、ご尽力いただいている関係者の皆様のおかげであり心より感謝申し上げます。

読書感想画部門

臼杵市長賞

ユニコーンに変身するお家

カトリック臼杵幼稚園　田代　和

書名　にぎやかもりのツリーハウス

著者　新井　悦子

臼杵市議会議長賞

おいしそう!!

下南こども園　三浦　煌織

書名　サンドイッチ　サンドイッチ

著者　小西　英子

臼杵市教育長賞

ピートのぶどういろのくつ

アソカ幼稚園　髙橋　陽向

書名　ねこのピートだいすきなしろいくつ

著者　エリック・リトウィン

優秀賞

じっぴきのりすさん

野津こども園　甲斐　光

書名　どうぞのいす

著者　香山　美子

優秀賞

タコようちえん

すみれこども園　河野　月奏

書名　イルカようちえん

著者　のぶみ

優秀賞

にじいろハウス

カトリック臼杵幼稚園　小手川　颯

書名　にぎやかもりのツリーハウス

著者　新井　悦子

優秀賞

がたくん

かいぞえこども園　菅野　湊士

書名　くわがたのがたくん

著者　高家　博成・仲川　道子

優秀賞

ぬまのぬし

野津南保育園　長野　悠

書名　やまなしもぎ

著者　平野　直／再話

優秀賞

そらのしんごう

市浜こども園　野間　悠月

書名　しんごうきピコリ

著者　ザ・キャビンカンパニー

優秀賞

かわのなか

海辺こども園　日隈　朱里

書名　あまがえるりょこうしゃちかたんけん

著者　松岡　たつひで

優秀賞

かぐやひめ

うすきこども園　平川　紗菜

書名　かぐやひめ　竹取物語より

著者　中脇　初枝／再話

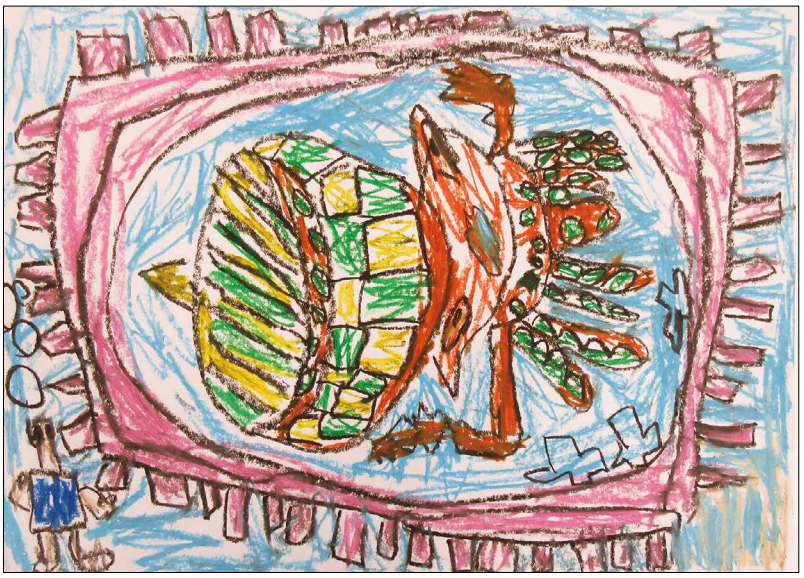
優秀賞

凍っているいか

臼杵中央こども園　若狭　碧空

書名　だいおういかのいかたろう

著者　ザ・キャビンカンパニー



審査評〈感想画部門〉

【市長賞】　田代　和さん
ワクワクした気持ちが伝わってくるツリーハウスですね。
緑の森に映える紫のツリーハウスが印象的で、雲に届きそうな夢のような世界が感じられます。自分の姿も描かれていて、物語の中でいきいきと楽しむ姿が伝わってきます。見ていると「にぎやかもりのツリーハウス読んでみたい！」と思わせる魅力もありました。

【市議会議長賞】　三浦　煌織さん
サンドイッチに入っていたら嬉しいと思う食べ物が画用紙いっぱいに描かれており、自分の好きなものが伝わってきました。クレヨンで色を塗り重ねたり、絵の具のにじみを活かしたりして、のびのびと描きあげられています。

【教育長賞】　髙橋　陽向さん
ねこのピートが画用紙いっぱいに描かれ、ピートの表情からいろいろな気持ちが伝わってきます。ぶどうの山に登って紫色のくつになっているピートを想像して、クレパスと絵の具を使って生き生きと表現されている作品です。

【総　評】
今年度で十回目となる「読書感想画コンクール」では、市内十一園から百九十七点もの応募をいただきました。本コンクールは「うすき読書のまちづくり」の一環として、既に実施されていた読書感想文に加え幼稚園、こども園、保育園に通う翌年度一年生になる児童を対象に取り組んできたものであります。毎年多くの応募をいただきあらためて、幼稚園、こども園、保育園の関係者の方々の積極的な取り組みに感謝するところであります。
本年度の審査は、臼杵市教育研究協議会（小学校図工部会）の担当教員の方々に審査をしていただきました。
審査会場いっぱいに広げられた子ども達の作品から、あふれる思いに圧倒されながらも楽しく審査させていただきました。
感想画は、挿絵をまねしたり、写したりするものではなく、本の世界観を想像して描くことが大切です。本審査では、本を読んで感動したことや自分の心に残ったことが生き生きと自分らしく描かれているか、また自分が描きたいことが見る人にしっかり伝わるかどうかを基準に審査をしていきました。子ども達の作品には、読んだ本から想像力を膨らませ自分なりの世界観をのびのびと表現したものや本の中に入り込み、物語の中に入った自分を表現したりしたものと細かいところに子ども達の思いがたくさん詰まった作品が多くみられました。
日頃から、園の先生方が本の読み聞かせをする中で想像を膨らませたり描きたいものを広げたりするための声がけを丁寧にご指導してくださっている様子がとても伝わってきました。
賞に選ばれた作品は、余白を含め絵の具やクレヨンなどを使いながら白い画用紙いっぱいに色や絵を使い自分の思いを表現したもの、また絵の中に入り込んだ自分から見える世界をのびのびと表現できている作品ばかりです。
年齢的にも一つの作品を根気強く完成させることが大変だと思いますが、色遊びなどの活動を通して自分の思いを色で表現することの楽しさもたくさん経験してほしいです。
幼児期に本と出会うことはとても大切な事です。これからもおうちや園でたくさんの本と出会ってください。そして、本の世界を楽しみ、感じたことを身近な人と話したり、体で表現したり、絵を描いたりすることを通して、より本に親しんでほしいと思います。
小学生になって、ますます本の世界が広がっていくことを願っています。